



# 遠江・山と里の民俗

会報 第006号

## 横尾歌舞伎に感謝

高須登志江

「着太鼓が鳴らされました。花とみかんと歌舞伎の里 東四村開明座にお越しいただき・・・」放送を始めます。私は定期公演などで司会・進行を勤めています。

横尾歌舞伎に関わるようになったのは、敬老会の司会をしたことから始まる。そして、敬老会当日、来賓で出席していた現会長から「あなたの声はとても聞き易いので、プログラムを読み上げるだけでいいから是非公演会の司会も」と説得された。

引き受けたものの、渡されたプログラムを見て参った。読めない。意味も分からない。困り果てて、歌舞伎に詳しい古老に教えを請うた。当日はただ間違えないようにとそのことだけで、舞台裏で働く人たちの「安達三の時と同じだ」「小原ではこうやっていよ」と、飛び交う声もちんぷんかんぷん。身の置き所もなく恥ずかしかつた。

その様子を聞いた主人は、「分からないことはそのままにしないで、とことん調べてみたら。本を読むのが好き、話すのも平気。それを生かして歌舞伎を楽しんだらいい」とアドバイスしてくれた。

幸い秋から春までは田と畑の仕事は暇になる。加えてそ

の時期は、毎週のようにあちこちで芝居・神楽・田楽と郷土芸能が行われる。あると聞くと、主人の運転で出かけるようになった。そして、地域の人の、由来や内容、見聞して分からないことはやたらと聞いて回った。みんな、迷惑がる様子も見せず丁寧に教えてくれた。携わる誇りと使命感が伝わってきた。見学している人の話にも耳を傾け、時には質問もした。個々の郷土芸能が、その土地や人々の生活・歴史等と深く関わっているのは当然だが、郷土芸能同士も線としてつながっていておもしろくなった。遠いところへは旅行も兼ねて出掛け、それも楽しかった。

頭がいい。行事や故事など巧みに入られて、しゃれつ気のあの言葉遣い、現代人はかなわない」と感心するばかりだ。歴史が好きな主人は、感想を述べながら、上演する演目に関係する本を差し出してくれる。事務局の克昌さんは、「こんな資料を見付けたよ」とさりげなく言って、本や資料をどんどん貸してくださった。その上、「この講話やワークショップに行く」と歌舞伎のことがよく分かるよ」と紹介もしてくれた。地区の古老は、喜々として、先輩から聞いたことや自分の経験談を話してくれた。回りの人たちのサポートと励ましのおかげか





らか、見知らぬ人と地芝居い  
て話し込んでいたら、「あなた  
は、まるで地芝居の追っかけだ  
ね」と言われるまでになった。  
私の仕事は、公演の全体進行  
であるが、大きく分けて二つの  
放送がある。一つは、上演前の  
演目の解説。プログラムに書か  
れた内容をそのまま読み上げる  
のではなく、歌舞伎通でない人  
でも分かるようにと、自分なり  
に書き直し、原稿を作っている。  
二つめは、幕間を利用しての役  
者へのインタビュー。舞台設定  
のため幕間は長い。花道を使っ  
て、今演技を終えたばかりの者

もう一つ、地域の人との絆を  
作り・深める役割を果たして  
くれている。司会・進行の  
仕事は、役者は言うに及ば  
ず、大夫・三味線・舞台係・  
衣装床山係・音響係・受付・  
花書き、そして売店の人た  
ちとも関わっている。だか  
ら、放送しているとき以外は  
あちこち飛び回っている。  
歌舞伎を続けることで、他  
所から移り住んだ私にも、気  
軽に声を掛けてくれた、遠慮な  
く話せる仲間も増えた。  
私は今、横尾歌舞伎に心か  
ら感謝している。

の生の姿を見、声を  
聞いてもらうことに  
した。感想や役に対  
する思いなどを聞き  
・紹介する。解説が  
公ならインタビュー  
は私である。今はこ  
れに「名台詞に挑戦」  
を入れた。役者にな  
ったつもりで言う、  
観客参加型の時間  
ある。舞台と客席に  
一体感が生まれ、役  
者と観客が親密な地  
芝居のよさをより味  
わってもらいたいと  
願っている。  
私にとって、歌舞  
伎はおもしろさの根  
源となつているが、

### 中世文学会出演 遠州に伝わる 中世の信仰と芸能

平成二十七年十月三十一日に  
静岡文化芸術大学で開催された  
中世文学会の特別講演として、  
懐山のおくない、神澤おくない、  
西浦の田楽が出演しました。全  
国から集まった中世文学の研究  
者の前での講演でしたので気を  
張り詰めて臨みました。  
初めに神澤おくないの「万歳  
楽」が演じられました。

「正月ましまさば、正月まし  
まさば、堂へ参ろう、堂へ参ろ  
う。新玉の新玉の、年たつ初め  
のあしたにはあしたには。万歳  
楽、万歳楽、万歳楽」と参会者  
との掛け合いで場を清めて始ま  
りました。

続いて、懐山のおくないの語  
りの世界を公開しました。「鞠  
やなど出来て候ひし。鞠や蹴る  
具足に何わのものが要り候ひし。  
扇の笏拍子、していどうどうと  
打ち鳴らし、直垂野衣紋が袖を



神沢おくない 万歳楽

鳥追いが声高々と詠じ  
られ、聴衆はさながら  
中世の芸能空間に迷い  
込んだ感覚を体験しま  
した。  
追い。政所殿の鳥追い」  
（一部現代語読み）



懐山のおくない「駒の舞」博労との駆引きが面白い

引き合わせ・・・と蹴鞠  
の世界を大石博次会長が語っ  
てくれました。「駒の舞」「綿  
買い」「稲ぶら」「夜明けの  
獅子」が演じられました。  
最後に西浦の田楽は「高足  
もどき」「水口」「種まき」  
「鳥追い」「のたさま」「鞍  
馬」を演じました。

「これはたが鳥追い。天日月  
の鳥追い。これはたが鳥追い。  
今夜今宵祝れまします薬師如  
来、当堂鎮守伽藍の鳥追い。  
これはたが鳥追い。鎌倉殿の  
鳥追い。これはたが鳥

### 第十一回浜松やらまいか交流会 で川名のひよんどり披露

年一回、東京で活躍している  
浜松出身の人たちに市政報告を  
している。その後の交流会にお  
いて浜松市の無形民俗として  
「川名のひよんどり」獅子の舞  
が披露されました。前嶋功保  
会長が芸能解説をしました。



西浦の田楽 種まき

# 勝坂神楽



十月二十五日、勝坂を訪れました。春野市街地から隧道を抜けて細い道を北に向かうと朱塗りの吊り橋「神楽橋」に出会います。川の対岸が神楽を舞う清水神社と八坂神社です。

勝坂神楽を特徴づける女物の着物と獅子頭にまず驚きました。その着物の柄はやはり牡丹でした。見る者の心を驚掴みにする鮮やかさです。そのいでたちで舞うのは保存会員です。境内を埋め尽くさんばかりのに囲まれて二頭の獅子が舞を披露しました。

## 勝坂神楽の由来

市指定無形民俗文化財

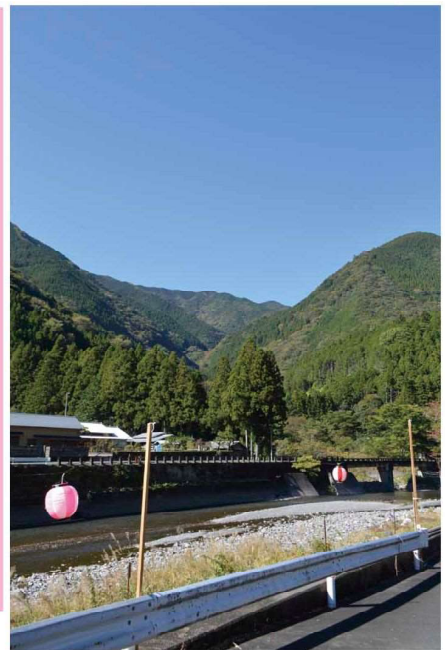
春野町勝坂地区に在る八幡神社並びに清水神社の祭典（毎年十月下旬）に際して、土地の若衆一同によって舞われる神楽である。

八幡神社には、「慶長六年辛丑年十二月吉辰（一六〇一）奉造障南官大明神社頭一文字」と記された棟札が所蔵されており、その記録の一部に「神入弥宜森山の源助（現八幡神社宮司鈴木房治氏の先祖）並に左近尉神楽男子各々諸願成就」としての記述がある。寛文十二年（一六七二）、社名を八幡神社と改められ現在に至っている。

神楽の発祥は祥かではないが、由来記によれば三百六十年余の伝統を持ち、天下泰平、武運長久、氏子繁昌、五穀豊穡を祈る行事であるという。

神楽舞は男子に限られ、両社の神前に於ける奉納神楽獅子舞と渡御の道中舞の二つからなる。元来獅子頭を被って舞う一人立舞で二人の横笛と大小二つの太鼓の音に合わせて、おかめに裾を持たせ自ら舞うのであるが、清水神社の舞を「ほろ舞」といい、八幡神社前の舞を「ぬさ舞」といわれる。

最初、清水神社前で一人立舞が行われ、終わると亀面を被った若衆に先導され、獅子舞を先頭に揃いの浴衣を着て、花笠を被り手に各々祓を持った若衆十人余りが手振面白く舞いながら八幡神社前に至り、獅子舞



を中心にして花笠若衆で輪形を作り、祓を操りながら楽の音に合わせて、輪形をせばめたり開いたりしながら踊る素朴な舞である。

輪形は古代人の最も崇め恐れられた太陽を型地つて舞われるものといわれ、永い伝統の上に培われ、昔ながら保存されてきた郷土色豊かな神楽である。道中舞の行列中に大いなる男根の模型を背負って行く若衆のあるのもまた奇観、男根は太陽に通ずるものと思われ、古代色豊かな神楽である。

「春野町の文化財 第三版」より

境内に若夫婦や子どもが目立つのは子育て、子授けの神と崇められているからです。



# 南信州から民俗芸能継承の視察

十月二十九日、南信州民俗芸能継承推進協議会の一行が、浜松市内で取り組まれている保存継承の取り組み状況を視察に訪れました。南信州では、高齢化と人口減少の影響で祭事の存続が危機的な状況になっている地域があり、今後、継承活動活性化のために官民一体で取り組んでいくそうです。

午前は、横尾歌舞伎「開明座」において、地域全体で継承活動に取り組んでいる状況の視察に訪れました。横尾歌舞伎保存会の高井勇会長が現状を説明し、小中学生など子供だけでなく、二十〜四十代の青壮年層も多く参加しており、歌舞伎が地域の誇りとなっていることを語りました。

午後からは、会場を川名ひよんどり保存会事務所に移し、太田好治文化財課長を交えて、保存会と行政関係者で意見交換を行いました。はじめに、川名ひよんどり保存会の前嶋功会長が現状を説明し、若年層（二十代）の人口減による若連不足が一番の課題であることを語りました。また、これまで女人禁制だった舞に中山間地域協力隊の女性を参加させたり、積極的に子供の参加を促す取り組みをしていることも説明しました。「（文化財として価値を失うような）変化をしないために変わる！」「途絶えてしまわないために変える勇気！」が必要であることを自らの指導経験をもとに語ったことが印象的でした。



今回の南信州からの訪問で、それぞれの地域が抱える課題点を共有することができ、民俗芸能の保存継承への取り組みを通じた三遠南信連携の端緒が開かれたものと確信しています。

## 第二十三回 三遠南信サミット

in 東三河 参加報告

「風土」分科会 上嶋裕志  
 （浜松市無形民俗保護団体  
 連絡会 事務局次長）

### ・民俗芸能保存団体のネットワークづくり

内容

三遠南信サミットでは道路・経済・生活など、今までさまざまな角度で議題になってきた。今回分科会の風土の中に生活の根底にある祭りを取り上げたいと思います。

いわずと知れたこのエリアでは日本の中世の祀りがそのまま残っていると。全国に類を見ない国指定重要無形民俗文化財の祭りがそのままだ。



文化財や県指定・市指定でも驚くものが沢山あります。この根底に流れているものは伊那谷の文化そのものです。この三つのエリアで独特な文化に変化して存続していますが、現状を見るとどの地域でも数々の問題を抱えております。

少子高齢と限界集落が中山間地におけるこの民俗芸能の継承が危機的な状態になっているのが現実です。

この地域の祭りは日本遺産や世界遺産にも充分なれるスペックは持っています。それを支える地域基盤が揺らいでいるところもあります。

そこで今回、三遠南信の民俗芸能の連絡協議会が立ち上げられ、提案します。まずは各エリアごとに協議会が立ち上がり三つが足並みをそろえて三遠南信の民俗芸能として、日本遺産に連携をもって登録申請をめざしていくこともできるでしょう。ただし、日本遺産はオリンピックまで観光客を誘致する観光目的とも聞いています。

「人が来てもおもてなしが出来ない」「当日はお祭りだけに専念したい」など地域特有な問題がでてくると思います。各問題を協議と連携する場が必要となります。

自分達の祭りが日本遺産という冠だけでも付くことが出来れば、村から出て行った人たちは生まれたところの祭りは、日本遺産だと自覚をもって参加し継承することも期待されます。また祭りを継承していくことは文化遺産を伝えていくという役目となります。

いずれは世界遺産をめざして。

### ■編集後記

市内の無形民俗文化財のお祭りを訪ねると保存会の皆さんが相互に訪問し合っている姿を見かけます。この連絡会ができてから殊に顕著になったように思います。それぞれの特長を認め合い、励ましに高まっていくよい機会になると思います。

過疎化や高齢化等の悩みを持つていることはどこも同じですが、それを乗り越えて次代につなげようという工夫と意欲を共にしていく機会になっていくことが人切でしよう。

浜松市は無形民俗文化財の価値を再認識してくれている姿勢を強く感じます。この気運の中で担当者自身が自覚して保存継承に一層力を入れてくださることを期待しています。

この会に加入していない無形民俗文化財が市内には幾つかあるようです。仲間に加わって共に保存に尽力できることを切望しています。そうした情報をお寄せいただくと幸いです。（柴）